

『納棺夫日記』考

上田正昭

プロローグ

09年の夏は冷夏と呼ばれ、過ごし易かった。早々に秋の氣配が漂い、虫達は大燥^ほ燥^き。

幸い、鉦と太鼓で騒ぎ立てた新型インフルエンザも、私の住む世田谷の高齢者住民地域ではさして流行の兆しもない。さて何故「プロローグ」などと書き出したかというところ、八月も終わりに近く、ひよっと氣になる一通の葉書が届いたが、

ちよっと飛ぶが、私を『医芸云』へ紹介、投稿を勧められたのは、日頃気安く「通さん」と呼んでいる親友、プロの詩人でもある同じ地区医師会員、同年輩の高橋 通先生。

「ひよやく遅時きながら最近になり文章らしくなったのは、勿論お世辞、胡麻搦りでもなく、通さん」のサジェスション

のお陰なのだ。

「ことに今年の夏は小学校からの級友達続いて亡くなり、いささが落ち込んでいた折でもあって、一通の葉書に励まされたように、嬉しい。」

無断で恐縮だが、彼の葉書の文面の一部を記してみる。

「何度も読んでみました。……深く静かに読む程に味合い深く感じられます……」。

『医芸云』夏季号「医家随想」欄へ投稿した私の拙文「呆け防止に 日記を書くこと」に対する彼の評。

嫌な言葉だが日頃老人と呼ばれ、好むと好まざるに拘わらず世間からは片隅へと追い遣られている。

そんな理由にならない理由で「プロローグ」を書き出した。すると、ひよっと反射的に「エピソード」といった対比語が脳裏を掠め、当然ものごとには始めと終わり、決して不思議ではないのに、妙に楽しい文章にならないよつな、嫌な予感を覚える。胸騒ぎというのだらう。

『医芸云』の前号、拙文中五月十二日毎日新聞連載、「Dr. 中川の癌から死生をみつめる」(中川恵一・東京大附属病院准教授、緩和ケア診療部長)の記事を再度参照してみる。

人間の身体は生涯五「回ほど細胞分裂を繰り返す。しかしDNAも老化し、「コピー」不能状態になると、生命活動にヒリオドが打たれ、死を迎える。

ちなみに09年ノーベル医学生理学賞は米カリフォルニア大サンフランシスコ校のエリザベス・ブラックバーン教授、米ジョンズホプキンス大のキャロル・グライター教授、米ハミルトン大のジャクス・ジョスタク教授の三氏が受賞され、前記細胞分裂を司る染色体末端の「テロメア」とそれを作る酵素(テロメラーゼ)の機能を発見して、その研究が評価された。

ちよっと前になるが今年一月、81回アカデミー賞外国語映画賞を受賞したというニュースが舞い込み、明るい話題払底のこの頃のこともあって、世間は大騒ぎになる。

映画「おくりびと」小山薫堂脚本、滝田洋二郎監督、木本雅弘主演で、青木新門著『納棺夫日記』を映画化したもの。映像では、主人公、程々の腕のチェロ奏者の大悟(木本)は、楽団の解散、失職の憂き目を見、妻の美香(広末涼子)を連れ、故郷の山形県酒田市へ戻り、新聞広告で旅行会社と誤解して、いわゆる葬儀社の下請け、遺体の死亡措置をし納棺する会社へ就職する。

その様な仕事は忽ち周囲の知ることになり、旧友にも親戚にも疎まれ、女房まで逃げ出し、或る転機があつて故人を“おくる”仕事に俄然意義を見出すというストーリー。

小説の『納棺夫日記』第一章「みぞれの季節」を繰く
昨夜、体を求めたら拒否された。今の仕事を辞めない限り、嫌だという。

「穢らわしい、近づかないで！」
とヒステリックに妻は拒否した。
特に「穢らわしい」という言葉に、怒りを覚えた。

言葉で衝撃や怒りを覚えるということは、自分が最も気にしていることを突かれたということである。人は日頃気にしていることを、あからさまに非難された場合、血が逆上するほどの怒りを覚えることがある。

この「穢れ」という言葉こそ、古代社会から今日まで、どのように思想や異文化がこの島国に流入して来て、決して滅びる事なく日本民族の心の深層部に巣くつて脈々と生き続けて来た。それはあたかも、生物の染色体にインプリントされた遺伝子情報にも似た確かさで連続とわれわれに受け継がれている。

折口信夫や柳田国男から始まるわが国の民俗学者たちが、各地の風俗習慣の冠婚葬祭も儀礼文化を調べて行くと最終的

には、「ケガレ」と「ハレ」というアムバーのような原始的な思想に行き着く。

「ケガレ」の内容は、既に古代（注・平安時代）の「延喜式」の中に細かく規定されている。

.....
これら穢れからのがれることが、人々の最大の関心事であつて、見えないように遠ざけたり、一線を引いて隔離したり.....

しかし、どうしても隔離したり、遠ざけたり出来ない場合がある。そんなとき不浄や穢れを浄化する儀式としてオハライヤキヨメを行い、一瞬にしてハレに転換するのである。

第三章「ひかりといのち」

いつの間にか、宗教書を読むようになっていた。悶々として過ごした頃は、『歎異抄』一冊を心の支えのように読んでいたが次第に宗教に関するものなら手当たり次第読んでいた。そんな乱読の中で、あの不思議な光に最も明解な回答を与えてくれたのは親鸞であった。

「光の溢れる書 『納棺夫日記』に覚える喜び」二一 高史朗

青木新門さんは、まさしく死者を見つめることを通して、私たちが喪失している生の本源的光を回復させているのである。

る。

同 五

巻末の文章を読んで、紹介を終わりにする。
末期患者には、激励は酷だ。善意は悲しい。説法も言葉も
いらぬ。

と語っている。地獄に落ち、跪き^{あが}苦しみ、ようやく自分で這い上がった者の真摯な声。

そう、これから私もそうしよう。

いささか私事で恐縮しますが、先の青木氏と立場は相違するも、私も死体を抱き抱え、恐怖で身の毛のよだつ思いをした経験を持つ。

時は、太平洋戦争敗戦後、日本はGHQ占領下、食糧を食券で配給。小生学部一年、基礎の研究室は人も物も不足。解剖学の教授が学生の入局を要請、机も与えられ、照れ臭いが白衣着用し、誇らしかった。

当時、解剖実習用の献体は極端に不足。そんな折、夏休み直前の或る日のこと、山梨県から仏さんを受け取りに来る様連絡が入る。

教授「運送屋を手配した。先方にも挨拶してある。立ち会っただけでいい、頼むぞ！」

何んとも私が使者に指名された。

ポンコツトラック、勿論冷房などない。高速道路もなければ、道路は凸凹、やっと先方へ着く。荷、遺体を車に運んでいただき、本当に頭を下げるだけで、帰路に付く。

教室では遺体の腐敗防止処置の準備をし、車の到着を待つ



ている。

助手、急いで遺体を実習室へ運べ」といとも気安く告げる。

台車に屍を乗せよつと、ひよつと持ち上げたが、重くて動かない。意識していたのに、肌に触れたら氷の様に汗は引き、

冷や汗が流れ、震えが止らない。

「勇氣、勇氣を出せ」自分自身に言い聞かせ、叱咤。

屍体を手動クレーンで吊り上げ、コンクリート製の解剖台へ横たえ、全裸にする。

再び助手「次は腐敗対策、覚えるよ」

すでに吊るされた大きなイルリガートルにゴム管、カニコーレへと繋がっている。大腿内側を切開して股動脈からホルマリン液を注入、無論血液とも交換されるに、およそ一日を要す。

それから実習室の隣室、銭湯の湯船のようなホルマリン槽へ、そこで仲間達と共に沈む。肺から空気が抜けてるから。

解剖実習終了後に献体は茶毘に付され、順次家族へ返納する。

それから年に一度、解剖教室主宰の合同慰霊祭が池上本門寺で営まれ、関係者、学生が集まって、故人の冥福を祈念する。

だからという理由ではないが、縁があつて、禅宗、臨済宗

文京区にある小池心叟老師（印記受領者）龍雲院、在家の白山道場、日曜禅会「直心会」門を叩き、入門を許され、

いよいよ相見の礼。そして入室を許可、喚鐘一点、隠寮へ赴き、合掌・三拜、師弟端坐し、直ぐに法戦（公案）禅問答。

例えば、禅録『無門関』第一「趙州和尚 囚僧問、狗子還有仏性也無。州之無。

すかさず師家は学人に向かつて、「無を出してみる!」と迫る。更に次々拶処、類題が繰り出される。

いわゆる葬式仏教とは全く質を異にする人間を生かす真の仏教の姿といえよう。

七月二十八日(火)の毎日新聞朝刊、くらしナビ欄を開き、連載記事

Dr. 中川の『癌から死生をみつめる』副題「生活から消えた死」を読む。

今や「畳の上で死ぬ人はほとんどいません。8割以上が病院のベッドの上で亡くなっています。しかし、50年前は8割以上が、そして僕の生まれた1960年でも7割の方が、自宅で亡くなったものでした。

一方、核家族が進んで、現在、小学校の1クラスで、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしている生徒は1〜2人と言われています。

「核家族」と病院死。これらが、日本人の死生観に影響を与えていると思います。少し前まで、日本人は大家族で暮らし、生まれ育った家の畳の上で死んでいました。子どもたちは、自分の老いと死を生活の中で「予習」できたわけです。

今の子どもが一緒に暮らすのは若い両親だけになり、生活の中で「老い」を見ることはありません。死は、病院の中に「隠蔽」され、やはり生活や意識の中から消えてしまっています。

あるアンケートによると、「死んでも人は生きかえるか」という質問に対して、小学生の34%が「はい」。32%が「わからない」と回答しています。死の「リアリティー」が失われてしまっているのです。……と記述されている。

いかに科学が進歩しようと、台風や地震といった災害は避けようもない。

そんな際の心得を江戸後期の禅僧・良寛(一七五八〜一八三三)は、何といつて被害者を慰労したか聞く。

文政十一年(一八一八)十一月、新潟・三條での大地震の被害者、山田村皇三郎の、良寛からの消息、手紙、地しんは信に大変に候」

しかし災難に逢時節には、災難に逢ふがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是ハこれ災難をのがる、妙法にて候。

「坐禅作法」合掌、結跏趺坐、法界定印、「調身、調息、調

心」